志雲会東京第一回勉強会

テーマ：「古事記　大国主命の国譲り」　要約（その１３）

松田　武

古事記についてのお話は（その１２）で出雲大社の不思議について論じました。今回はその不思議に対して筆者の考え方を述べさせて頂きたい、と思います。これを語らずして、「古事記　大国主命の国譲り」のお話は完結致しません。

即ち、出雲大社における大国主神の祀られ方をみれば、（その１２）で述べました通り、大国主神は亡くなった神として出雲大社に封じ込まれているように見えます。もし封じ込まれているのであれば、お詣りしても何のご利益も得られないことになってしまいます。

毎年お正月に出雲大社に初詣される参拝者は、約６０万人と言われております。そして、年間を通じ全国各地から参拝者が絶えません。ご利益が無かろう筈はありません。封じ込められているのにご利益がある、その理由について私見を述べさせて頂きたいと思います。先ずは玉の緒について。

１６．玉の緒とは

（1）神々の玉の緒

①玉の緒の歌

女優の中村玉緒さんは有名でありますが、「玉の緒」はあまり聞き慣れない言葉であろうか、と思います。まず、“玉の緒”で Google を検索してみますと、次の歌が出て参ります。

『玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする』

この歌は、後白河法皇の娘であった式子内親王（しょくしないしんのう・しきしないしんのう）がお詠みなったものです。意味するところは、「（私の）命よ、終わるのなら終わってしまえ、このままでは耐え忍ぶ力が弱って、(心に秘めた恋がばれて)しまいそうでだから。」ということだそうです。即ち、ここでは「玉の緒」は命の代名詞として使われております。

筆者はそれに対し、「玉の緒」とは人の“魂の様子”を表しているのではないか、と観ております。

この歌の別の解釈として、（後半部分）を「生き永らえていると忍びきれなくなってしまうかも知れないから魂を繋ぎ止めている緒が絶える（＝切

れる）と、魂は身体から抜け出してしまう（＝死んでしまう）」というものであります。「玉の緒」を筆者と同様に“魂”として捉えている方がおられるのが分かり、少し安心した次第であります。

②荒魂、和魂

良く知られていることに、神道では神の魂は２種類ある、というものがあります。

荒魂（あらみたま）とは神の荒々しい側面、荒ぶる魂であり、

和魂（にぎみたま）は神の優しく平和的な側面である、

言われております。

そして、和魂はさらに幸魂（さちみたま）と奇魂（くしみたま）に分かれます。（しかし、この４つ魂は並列であるとも、言われます）幸魂とは人に幸を与える働き、収穫をもたらす働きであり、奇魂は奇跡により直接人に幸を与える働きであり、知識才略、学問、技術を表す、とされております。

これら４つの魂はバラバラに存在するのではなく、ちょうどネックレスのように、紐あるいはチェインで繋げられているのではないか、と筆者はみております。その紐が「玉の緒」と言われるものです。

しからば、玉は４つだけでしょうか。つまり、荒魂、和魂、幸魂、奇魂以外に魂はないのでしょうか。あると思います。それは、怒る魂、悔しがる魂、妬む魂、悲しむ魂などの魂であります。

③神々のさらなる魂

古事記を学んだ我々は、八百万の神々は、ほぼ人間と同様の感情を持っておられることを知っております。怒る魂、悔しがる魂などの魂を神々が保持されていて何らおかしくはありません。これらの魂も玉の緒で繋がれているものと考えられます。

従って、本稿のテーマ、「封じられている大国主神にお詣りして、何故ご利益があるのか？」に対する回答は「封じられているのは、怒る魂、悔しがる魂であり、他の貴い魂は厳然と輝いておられる」ということになります。

（２）人の玉の緒

人の魂も様々な働きをする心が「玉の緒」で繋げられているものと考えられます。こころは“ころころ”に通じ、人の心はコロコロ転がる丸いというイメージがあります。その丸い心が玉の緒で繋げられているの

が、我々の心と言うもののようです。それは、次のような日本語から分かります。

おびえる＝緒冷える　おじける＝緒湿気る　おじる＝緒散る
おそれる＝緒逸れる　たまげる＝玉消える

「今泣いた烏がもう笑ろた」とは、すぐ機嫌が悪くなったり良くなったりする子供の様子を語る表現であります。心はころころとよく変わります。玉の緒に繋げられている様々な心が出たり、引っ込んだりしているのでしょう。

１７．祟り神への信仰

（１）　御霊（ごりょう）信仰

我が国では、元祟り神（怨霊）を祀っている神社が少なからずあります。有名なところでは、菅原道真公を祀っている各地の「天神様」、そして、「神田明神」などに祀られています平将門新皇であります。

古来我が国では、非業の死を遂げたりして祟り神となった霊を鄭重にお祭りする慣習があります。これは、鄭重にお祭りすることで、その霊の祟りを免れ、平穏と繁栄を実現しよう、という信仰であります。これを「御霊信仰」と言います。

（２）日本三大祭

① 天神祭

「天神様」は学問の神様として極めて有名であります。大阪の天神祭は日本三大祭の一つとされ、大阪市中心部を流れる大川を約 100 隻の船が行き交うメイン行事「船渡御（ふなとぎょ）」や、数千発の奉納花火打ち上げなどが行われ、見物客で大賑わいを見せます。

② 神田明神祭

「神田明神」は「江戸総鎮守」であり、勝負の神様として有名です。毎年お正月の初詣客もすごい人出ですが、正月三が日明けには、都内の証券会社をはじめ、多くの企業の幹部社員の方々が初詣に出かけ、境内立錐の余地もないほどの人出となります。神田明神祭も日本三大祭の一つとされ、たいへんな賑わいを見せます。

一の宮・大己貴命(だいこく様)、二の宮・少名彦命(えびす様)、三の宮・平将門新皇の鳳輦や宮神輿が、平安装束をまとった人々に付き添われ、粛々と秋葉原の電気店街などを行進します。神田明神祭で祀られる神様のお一柱が大己貴命、即ち大国主神であることに納得し、神田明神にさらに親しみを覚えます。

③　祇園祭

日本三大祭の３つ目は、京都の祇園祭です。そして、祇園祭と言えば八坂神社、その八坂神社の御祭神は「速須佐男命」であります。この祇園祭は明治までは、祇園御霊会（ぎおんごりょうえ）と呼ばれておりました。

（注）祇園御霊会の起源：かつて、天災や疫病は恨みを現世に残したまま亡くなった人々の怨霊の祟りであると考えられていました。そこで、疫神や死者の怨霊などを鎮め、なだめるために行う祭（御霊会）が行われました。しかし、京ではその後も疫病の流行が続いたために、牛頭天王を祀って御霊会を行って、無病息災を祈念したということであります。牛頭天王は釈迦の生誕地に因む祇園精舎の守護神とされ、また、我が国の神仏習合の神で、速須佐男命の本地とされております。

御霊様は賑々しくお祭りされることを好まれるようであります。そう言えば、天照大御神が天の岩屋戸にさし籠もられた際、「高天の原皆暗く、葦原の中つ国も暗くなり、夜ばかりが続き、萬の妖（わざわい）が起こった」時も、天の岩屋戸の前を美々しく飾りつけ、天宇受賣命が踊り、それを見た神々は大いに咲い、大賑わいでした。その結果、天照大御神は岩屋戸からお出ましになられ、世の中再び明るくなりました。

１８．明治天皇の大宮氷川神社へのお参り

（１）明治元年、明治天皇の大宮氷川神社御親祭

筆者は埼玉県大宮在住で、大宮氷川神社のほど近くに住む、氏子の一人であります。その大宮氷川神社に明治天皇は明治元年に行幸され、御親祭(御自ら祭祀をご奉仕する)をされておられます。

明治天皇は慶応４年（１９６８年）８月２７日に１２２代天皇の即位の大礼が行われ、翌月、元号が「慶応」から「明治」に改められました。

明治天皇は明治元年９月２０日に京都を東京行幸のため出発され、１０月１３日に江戸城に到着されました。そして、新たに東京が都と定められました。

その一方で、１０月１７日に大宮の氷川神社を当国の鎮守・勅祭の社と定められました。（武蔵一之宮とも称せられる）

同月２７日、大久保利通、西郷隆盛らの重鎮を含む大行列（約１キロメートル）を持って氷川神社にやって来られました。そして、翌２８日に氷川神社本殿にて、御親祭されました。

その明治天皇の大宮行幸・御親祭について、大宮氷川神社の三の鳥居の手前の参道脇に、大行列が描かれた絵と説明文記載の長いボードが設置されております。

大宮氷川神社の御祭神は、「速須佐男命」、そのお妃の「櫛名田比賣」、その子孫の「大穴牟遲神」という出雲系の三柱の神様であります。

氷川神社の広い境内には他に、櫛名田比賣の父親である「足上名椎（あしなづち）」、母親である「手上名椎（てなずち）」のお社があり、「少彦名神」そして、「速須佐男命」の姫神である宗像三女伸が祀られるお社もあります。他に稲荷神社、松尾神社もあり、大宮氷川神社はスサノオ・ファミリーの神々が集う神社であると言えます。

（２） 伊勢神宮参拝より先であった理由

明治天皇が江戸到着後すぐ大宮氷川神社に行幸され、御親祭された理由について、氷川神社の若い神主さんに取材して伺ったところ、「京都に都を移された桓武天皇が、遷都後まもなく賀茂神社に参拝された故事に倣ったものです。」との回答が得られました。

そして、大宮氷川神社の現在の楼門は下賀茂神社の楼門に似せて昭和１５年に建てられたものである、とのことでした

下賀茂神社楼門

大宮氷川神社楼門

桓武天皇の故事に倣った、というのも一つの理由でしょうが、古事記を学んだ筆者は、大宮氷川神社が選ばれた理由は、他にもあったのではないか、とみております。

理由１：御祭神「速須佐男命」

速須佐男命は出雲系の神であるとは言え、天照大御神の弟神であります。従って、最初に天降りされた邇邇芸命からすれば、大叔父に当たります。この大叔父は俗な表現をすれば、若い時はいささかヤンチャ（？）もしたけれど、巨大な八岐大蛇を退治した勇者でもあります。（こんな叔父さんがいたら、いいのになあ、と思うのは筆者だけではないでしょう。）

明治維新、王政復古という新しい時代において、実践の修羅場を潜って来た古強者である速須佐男命は、頼りがいのある神と言うべきであります。

理由２：御祭神「大穴牟遲神」

大穴牟遲神はのちの大国主神であることは言うまでもありません。少彦名命、大物主命の協力を得て、葦原の中つ国を開発・建設し、統一した正に大国主でありました。

明治の国作りには、大国主神の陰なる協力が必要であったと言えるでしょう。速須佐男命、大穴牟遲神は明治天皇から見て、共に頼りがいのある経験豊富な神々でありました。

（３）　明治天皇の伊勢神宮行幸

因みに明治天皇は明治２年（１８６９年）３月に伊勢神宮に行幸されておられます。

日本書紀によれば６９２年に持統天皇が伊勢神宮に行幸されておられる、ということですが、それ以後天皇による伊勢神宮への行幸は行われておりません。参拝には勅使を送っておられたということです。明治天皇による伊勢神宮への行幸は１，１７７年振りのことであります。

天皇家が伊勢に行く代わりに通った場所はどこだったでしょうか。それは「蟻の熊野詣」で有名な「熊野」でありました。

熊野本宮大社の主祭神である家都美御子大神（けつみみこのおおかみ）は、速須佐男命であるとも言われ、またその子供の大歳（おおとし）あるいは五十猛神（イソタケル）とも言われておりますが、スサノオ・ファミリーの影がそこにも出ております。

ただ、平安時代後期以降の浄土信仰の広がりのもと、熊野全体が浄土の地であると見做されるようになり、人々は浄土に生まれ変わることを願って、熊野詣でをした、ということです。

まだまだ語りつくせませんが、これ以上論を進めますと、「大国主命の国譲り」というテーマから離れて行きそうなので、そろそろ終了とさせて頂きます。

最後になりますが、本稿のタイトルは「大国主命の国譲り」となっておりますが、本文では古事記の表現に従って、「大国主命」を「大国主神」という表現にして参りました。タイトルでは、子供の頃から馴染みがあり、親しみを感じる「大国主命」を使わせて頂きました。長きに亘り「大国主命の国譲り」の拙文をお読み頂き、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

（了）

（余談）

１月の講演会のレジメの最後の部分で、“文人たちの神々への思い”を登載しておりました。以下の通りです。

１．　三島由紀夫の大神神社（おおみわしんじゃ）参拝

作家三島由紀夫は、古神道研究のため、昭和４１年６月大神神社の摂社である率川神社（いさがわじんじゃ）の三枝祭に参列されました。ついで親友のコロンビア大学教授ドナルド・キーン氏と８月２２日に再度来社。社務所に三泊参篭されました。三島由紀夫揮毫の「清明」記念碑が篤信家によって奉納建立されております。

「大神神社の神域は、ただ清明の一語に尽き、神のおん懐ろに抱かれて過ごした日夜は終生忘れえぬ思ひ出であります」（三島由紀夫）

２．小泉八雲（ラフカデオ・ハーン）
　１８９０年、３９歳の時に来日。「知られぬ日本の面影」「東の国から」「怪談」などの作品で世界に日本を紹介しました。１年３カ月間過ごした松江を「神々の国の首都」と呼んでいました。

３．西行法師も伊勢神宮に詣でて、こんな歌を詠んでいます。
”何事の　おはしますかは　しらねども　かたじけなさに　なみだこぼるる”